

2021. 6 月号

ハノイ日本人学校 学校便り

令和 3 年 6 月 1 日

## こころの道

# Nhan hieu Thông minh Khỏe mạnh



やさしく

ニャンハウ

かしこく

トンミン

たくましく

ホーエマイン



どぶ水の花

明石 清二

星野 富弘氏は、詩集の中で次のように書いています。「黒い土に根を張りどぶ水を吸って、なぜ、きれいに咲けるのだろう。私は大勢の人の愛の中において、なぜみにくいことばかり考えるのだろう。」と。



時々、ふと思い立っては星野氏の詩集に目を落とすことがあります。詩集に目がいくのは、気持ちが落ち着いているときのように感じます。多くの出来事が重なり、がさがさしているときや時間に忙殺されているときには目がいきません。もちろん、このようなときには、「本」そのものに目がいかないものです。

子供たちにも紙媒体に限らず電子媒体も含めて、多くの考え方・ものの見方に触れさせたいと考えます。自分自身をどう見つめ、どう生きていくのかを考えさせることが子育ての一つの側面なのかもしれません。

コロナ禍で先が見通しにくい現在、見える過去を大切にすることに何かヒントが隠されている気がします。過去をもう一度見つめ直すことで新しい道を見付け、これからの一日一日を大切に生活していきたいと思います。

星野 富弘氏は、次のようにも続けています。「いのちが一番大切だと思っていたころ、生きているのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った時、生きているのが嬉しかった。」

2011年3月11日に発生した東日本大震災は私たちの生活を一変させました。1,000年に一度という大津波を経験し、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなりました。2021年3月10日現在、亡くなられた方は15,899名、行方不明の方は2,525名を数えています。防潮堤やかさ上げ道路の整備など力強い槌音が聞かれ環境の復興は目に見えますが、心的な面での支援はこれからも必要です。震災後、沿岸部の学校に赴任したとき、目の前で母親が流されていくという辛い経験をした小学3年生の女兒は、毎日保健室に出かけては、保健室にある人形でお葬式ごっこをしていました。時々、校長室に来ては母親のことを話すけなげな様子に涙が止まらなくなることもありました。この母親をはじめ、自分の命をなげうってでも見ず知らずの人を助けようとする行動を目の当たりにしたとき、自分の命よりも大切なもの、それは人を愛し人を敬うという「人としての尊厳」に思いがいたりしました。



コロナ禍により、再度、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなった現在、人を信じることを第一に生活したいと考えます。

昨日、アンケート調査をお願いいたしました。皆様のお知恵を拝借しながら、御一緒にこの難局を乗り越りたいと考えています。御提案等、御記入をどうぞよろしくお願いいたします。